



この一冊

Vol. 108



当会会員 ● 村田 和希 (67期) ● Kazuki Murata

「人工知能 (AI=Artificial Intelligence) が弁護士に取って代わるのではないか」、このような話を目にされたり耳にされたりしたことのある先生はかなり多くいらっしゃるのではないのでしょうか。私も、大先輩の先生から「いつか契約書のレビューなんかはAIのディープラーニングでできるようになってしまうだろう。君らの時代は大変だね」などということあるごとに言われており、戦々恐々としていました。しかし、「敵を知れば…」ではないですが、何も知らないものに怯えていても仕方がないので、何かAIに関する本を読んでみることにしました。そうして手に取ることになったのが、日本における人工知能研究の第一人者による本書です。

著者によれば、人工知能は1956年から60年代に第1次ブーム、1980年代に第2次ブームがあり、いずれのブームも、当初人々が期待していたほど技術が発展せず失望のうちに終わってしまったということ踏まえ、三度目にめぐってきた現在の人工知能ブームにあたり、以前のブームのような実力を超えた期待をされないよう、人工知能の現在

『人工知能は人間を超えるか—ディープラーニングの先にあるもの—』



松尾 豊 著
中経出版
1,512円(税込)

の実力・状況・可能性を正しく理解してもらうことが本書の目的であるとのこと。

本書は、そもそも人工知能とは何なのかという議論から始まり、過去のブームにおいてどのような研究がされていたのかが語られ、そして、今までの人工知能研究が超えられなかった壁がディープラーニングの技術によってどう変わっていき、人工知能の進歩によって今後人間社会はどうなっていくのかについての著者の見通しが示されています。

本書のサブタイトルからもうかがえるように、著者は、ディープラーニングを人工知

能研究の歴史における大きなブレークスルーとして位置づけています。今までの人工知能研究においては、人間がコンピュータに注目すべき特徴を教えて学習させていた（例えば、「こういう特徴を持ったものがネコである」と人間が教えていた）ので、学習の精度は結局人間が選択する特徴の適切さに依存しており、そこに限界がありました。しかし、ディープラーニングによってコンピュータが大量のデータをもとに注目すべき特徴を自ら見つけ出し概念を獲得する（例えば、コンピュータが様々な画像を見て「こういう特徴を持ったものが『人間がネコと考えているもの』である」という概念を自ら作り出す）ことができるようになったことで人工知能が飛躍的に発展する突破口が開かれたのです。

今後、弁護士の業務が進化した人工知能によって本当に取って代わられてしまうのか。仮に一部の業務は取って代わられるとして、人間の弁護士にしかできない業務は何なのか。そのようなことを考えるきっかけとして、本書を一読してみたいかどうか。

